# 生田敦盛

昭和改訂版

外 四

特257
496

始

特257
496

帝國圖書館藏

# 生田敦盛

（梗概）黒谷の法然上人、ある日一人の捨兒を拾ひ取り、愍に育て上げしが、その子十歳ばかりになりし時、餘りに不憫なりとて、説教の後に聽衆に向ひてその事を語り給へバ、聽衆の中より若き女走り出で、「是は我が子にて候、父は平の敦盛よ」と語りければ、その子即ち夢ならぬ父に逢はせてたまわれと、加茂の明神に祈誓をかけしに、満參の日に「生田の森に行け」との御神託ありしかば、從者に伴われて生田の森へと尋ね行きぬ、されば爰に草庵あり、その灯の影に一人の若武者ありて「我こそ敦盛よ」と名宣り、こゝに嬉しくも親子對面し、敦盛は昔の戰物語をなしてありしが、妄執の修羅の矢叫び、白刄の閃めきに我を忘れて苦しむ有様、子に見せんも耻かし、急ぎ歸りて跡弔へやとて、立去る姿はかげろふの小野の淺茅の露と共に消へ失せけり。

シテ　平敦盛
子方　敦盛の遺子
ワキ　法然上人の従者
所　山城國加茂　攝津國生田
季　秋

# 生田敦盛

わき詞 是ハ黒谷の法然上人に仕へ申者にて候
是に渡り候幼き人ハ上人加茂へ御参詣
の時さがり松の下にて拾ひ給ひて候生
後々こと父母を恋ひ給へば或時聴衆の
うちよりわかき女性此おさなき人此

は母此の由申されバ此時又はたとも知らね
語ひて候へバ平家の公達敦盛忘れ
筐にて御座候由申され候此子を受し
いまだ父母に逢見給はぬ事を御歎き
候ひて賀茂の明神に一七日御参籠候今
日満参にて候程に某御供申只今賀

茂の明神へと急ぎ候程に糺
森の明神に御前にて候心静に御参詣
あらせ給ひて候　有難や許りある
御社の前の玉垣神さびて心も澄める
御手洗の深き恵を頼むべし　夢に
成生たらちをの面影を見せ給へ

同上 かく手弱る心の末とげがたく 真言ふ
などかこれを逢ふべきことゝ 捨糺の神は子頼ひ
わが社へおぶしませし 子方 荒ふしぎや
上 少し睡眠の中に あらたなる霊夢を
蒙りては わき あらめでたうこそ候へ 何
と申したる霊夢にて候ぞ 子方 御宝殿

の内より是をはかなくに給ひ父を出し給ふ
子成佗父を見んと思はゞ是より津の国
生田の森へ参れと あらたに霊夢を
蒙りては わき 是は嬉しき御事にて候
扨のさらば是よりすぐに生田の
森へ御供申さうずるにて候 二人上 山陰は

加茂の宮居を立出て〳〵急ぐ行方
は山崎や宝寺よそに見なしつゝ水無瀬川風
も身にしむ摺衣秋は来にけり昨日
だにとはんと思ひし津の国乃生田乃
森にもつきにけり　急ぐ程に是
は早生田の森に着て候あまりに人家

と遠くして火の光見えて候立越
宿をからばやと存候いかに此屋の内へ
しテ サシ上 存在本より皆是空何によりて平生
此身を惜まん栄花をなせる夢の幽魂を
夜月に照びうかれをとらしあらふ嵐
秋風ようそふくあらん其杉のむら

シテ　やな
ワキ上　ふしぎやな是成子は庵の内
に法色たなやかなる武者の甲冑
を帯し見へ給ふぞや是はいかなる人や
らん　シテ　愚の人は心や恥し面こそ見まで
来りぬるも我に対面の為なるぞや
恥しながら古への敦盛が亡霊来りたり

子方上　あふ敦盛とは別まし父ひと目にも見えんと
せざ是より　同上　袖にすがり泣こがる
まし　なくさまよふる常のあふ
互の嬉しさも却身に餘る涙なり
かくわすれがたのまれぬ夢の姿を
うつゝにのべたまふもの成　上むざんや

古き道のなでしこの花やか成べき身
なれ共ねところへたてつる思ひ深の袂をかへる
かるし衣たなき主をは身孝行乃心
深き故か茂此明神に出合ことこび
夢に成共家父の恩をわすれでよろこび給
へと行拝申す明神あはれとおぼし清し

闇主小師つかまつる闇主師をうけたまはり
あざしの脈を語る親子比契も今
を限りなるべし　更行月の取経
昔をしのぶや讃らん　絶るに争家此栄
華を極めし甚勤め花鳥風月の名
いふれ詩哥管絃の極みに至て秋を送

りむかへしぬいかなる折か来りなん木曽
此梯かけてたゞよはぬかなしきおもひ
をきよく一門の名をもおとし君
花の都を立出西海乃波に振きぬ
あらぬ旅の空ながら山をこえ海越
まてりちかひしはゐのまさこのる船の上

六

居の月なりしに又立返る浦波比須
磨乃山路や一の谷生田の森に住まひ
しかば我は都も殊色しき一門の人ど
も悦びをなしし折なれば上総より万
経の甚撃　雲や霞の如くにて集まく
戦ふといへども平家ハ遂にもつきはれや

七

二

とけ心も弱ことゝ皆苦行にありなて
あはれさも悩うき生田川の身を捨し
掬ぐより語るぞよしなかりける
まじやるな夢の契乃仮初なからし親子
何ふむの袖ふれそ　名残つきせぬ
心の乱　して　あまたにみえさるふいう成老

ず何閻丁宮より此法使とや　府時の賊と
彼はきしよ今迄の迷乗心悩ぞと
閻王いうさ世語ふぞと　いふうとうんれば嫁
しぎる風し　黒雲係よまとまり猛
火を投しと焼をふらして生数志らざる
修羅の敵天地をひゞかし満き歩り

物すごし昨義に　あれつる修羅乃敵
ぞらしと太刀生ひ向にさしかざし霞
やらしこに走りめぐ里　火花を散らし
てたゝかひしがしばらくありて黒雲
も渡界に立さり修羅のちまたに
ちまちに消失て　月もみまてりて

絶んじくたる暁の空と残りありたりける
しそちかうしや子などのらも　かく苦し
こゝをうんるとよ急ぎ陥りて跡残
思ひを晴らひたび跡なくし袂
まを引まきらさかる涙あゝらゞの小
望乃浦菅比露霜と加へ消えにけりそ

うせにけりかくちハ消て失にけり

401
28

内務省
納本

著作權所有

昭和十五年二月十五日印刷
昭和十五年二月二十日發行

定價金五拾錢

東京市下谷區上野櫻木町四十八番地
著作者　寶生新

東京市京橋區銀座西六丁目三番地
發行兼印刷者　江島伊兵衛

發行所　下掛寶生流謡本刊行會

終